

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	畔柳 理
論文題目	モザンビーク都市部における地場製造業の発展と技術利用に関する研究 ーマトラ市の零細金属加工業の事例ー		
(論文内容の要旨)			
モザンビークの都市部では、人口増加や都市中間層の拡大を背景に、国内消費者を対象にした製品を生産・販売する零細な製造業企業（地場製造業）が増加している。本研究の目的は、その生産の動態を明らかにし、アフリカ経済論のなかで地場製造業をいかに位置づけられるのか検討することにある。 序章ではモザンビークの地場製造業に関する先行研究を検討し、それら企業がインフォーマル・セクターとしてとらえられ、生産雇用規模拡大のために支援が必要とされている点や、企業を静態的にとらえている点を課題としてあげた。その課題を克服するため、本論文では、変化する市場との関係、利用技術の選択、生産品目の変化に着目し、地場製造業をとらえなおす研究枠組みを提示した。調査対象は、モザンビーク南部で増加しつつある、建具などを生産する鉄工所とした。 第1章では、モザンビーク経済が独立前後でいかに変化し、現在までいかなる変遷をたどってきたのか、文献および統計資料を通じて明らかにした。1950年以降、モザンビークにはポルトガルから多くの製造業企業が進出し、局所的に製造業企業が集積した。しかし1975年の独立以降、マルクス・レーニン主義を標榜した政府により企業が国有化され、生産量は低下した。また内戦により、植民地期の製造業の基盤が失われた。政府は産業構造の転換を図ろうとしているが、一部外資系の金属加工業の発展がみられる以外は、現在まで同国の産業構造に大きな変化はみられていない。 第2章では、モザンビーク南部の都市形成史を振り返り、19世紀終盤からこの地域が南アフリカの金鉱山への労働力供給地とみなされ、金鉱山から最も近い港を有するロウレンソ・マルケス（現首都のマプト）とともに発展してきたことを示した。首都に隣接し、南アフリカに通じる交通網が整備されたことにより、マトラ市は、住宅地と産業集積地としての機能を併せもち、人口が増加し、住宅需要も増加している。 第3章では、鉄工所という業態がどのように調査地に出現したのか、文献と聞き取り調査から明らかにした。鉄工所の起源は、植民地期、ポルトガル系企業で雇用された労働者が、独立をきっかけに企業の外で開業したことにあった。その後、国内経済の悪化による南アフリカへの出稼ぎ移民や、外資系企業に雇用されていた労働者たちが開業し、現在の業態を作り上げていた。それら鉄工所で徒弟をする者も増え、職業訓練校も設立されて、国内でも技能習得環境が整いつつあることが明らかになった。 第4章では、鉄工所の組織構造や生産活動の実態を明らかにした。鉄工所は、職人で			

ある経営責任者を筆頭に、上意下達の組織構造を有し、技能に基づく職位は企業間で共有されていた。生産については受注生産方式をとり、被覆アーク溶接機とディスクグラインダーという基本的な機能しか有さない機械が用いられていた。調査地周辺では住宅建設需要が拡大しているが、金融サービスが不足しており、施主が住宅部品を購入し、段階的に建築を進めることが一般的である。このような購買様式に応えるため、鉄工所では様々な建具の需要に応える汎用性の高い技術が選択されてきたと考えられる。

第5章では、地場製造業の技能の広がりと経営者意識について、複数企業の活動を比較して分析を行った。生産・雇用規模を拡大した企業では、コストの削減、作業時間の拡大、作業レイアウトの改善などの取り組みがみられた。また、市場からの要求に応じて新製品を開発した企業も確認された。各企業がそれぞれ戦略的に生産活動を行い、規模の拡大のみならず技術の広がりの方でも、発展の形が多様化していた。

終章では、ここまでの論点を総合的に議論した。モザンビークの鉄工所は、南アフリカに隣接しているという地理的特徴、植民地期終盤に局所的に製造業企業が集積したという歴史的経緯のうえに形成された。人びとが外部から選び取った汎用的な技術を用い、消費者や市場からの要請に応じて製品を作り続けてきた結果、いまある鉄工所の業態が成立してきたことがわかった。現在では、国内で、ものづくりを担う人材が再生産され、多様な製品が開発され、産業として成長の途上にあることを示した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、モザンビークの都市部に成立した地場製造業とそれを支える人びとについて、産業形成・市場拡大・技術利用の3点を交差させることにより、多角的に分析した実証研究である。零細製造業を静態的にとらえる従来の見方を乗り越え、変化する製造業の姿を、詳細でミクロなデータを基に描きだしている点に大きな特徴がある。

本論文の貢献は、以下の3点にまとめられる。

1点目は、地場産業を動態的にとらえた理論的・方法論的貢献である。本研究は、調査地の地場産業である鉄工所で観察や聞き取り、技術計測や実験から得られた詳細なデータを用いて、それら企業が零細で停滞的な存在ではなく、市場や消費者に対応しながらダイナミックに発展・変化し続ける存在であることを説得的に論じた。生産・雇用規模の拡大を経済発展とみなす前提を批判的に検討し、企業の製品構成や汎用的な技術選択に着目し、それを業態の発展として評価したことは、アフリカ都市のインフォーマル・セクターや地場製造業研究に大きく貢献している。

2点目は、モザンビークの歴史、マトラ市の形成過程、地理的要因を産業・技術発展と結び付けた重層的な分析である。本研究は、植民地期から独立、内戦を経て、モザンビークの政治経済がいかに変遷してきたか、さらにそれらがマトラ市の都市形成をどのように規定し、マトラ市の鉄工所という業態がいかに成立、発展してきたのかを説得的に論じている。また、南アフリカとの近接性や労働移動の歴史が、現在の鉄工所の技能形成や産業集積といかにつながっているかなど、地場製造業の発展を場所と歴史に埋め込まれたプロセスとして描きだすことに成功している。

3点目は、鉄工所における技能・技術・経営戦略の多様性を、多岐にわたるデータを用いて示したことである。調査地の鉄工所における技術獲得、汎用的機械の選択理由、企業ごとの経営改善や製品開発の違いを検証することで、地場製造業の発展が単線的ではなく、規模拡大・技術の広がり・市場対応ごとに多様な組み合わせとして動いていることが具体的に示されており、実証研究として厚みがある。このことから、企業とそこで働く人びとが、自ら考え、積極的に新しいことを試行錯誤する姿勢が、これまで地場製造業の発展を牽引し、またこれからも牽引し続けるだろうという著者の主張を裏付けている。

このように本論文は、アフリカ地域研究として、地場製造業を歴史的・地理的・技術的に位置づけた類のないものである。とくに、インフォーマル・セクターを「未発達」「過渡的」とみなす通念的理解に対し、現地の人びとの実践に即して再考を促している点は示唆に富む。また、汎用的技術の選択や受注生産という生産様式を、金融サービスの制約や消費者の購買行動と結び付けて説明している点は、零細製造業の合理性を内在的に理解する上で重要である。今後、他地域や他業種との比較研究が進めば、本研究の

枠組みはより広い地域研究・開発研究に応用可能であり、その発展性も高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2026年1月28日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。